

「赦す者にしてください」

詩 編 51編
ヨハネによる福音書 7章53節～8章11節

説 教 軽込 昇牧師

姦淫の現場を見つけられた男女は撃ち殺せ、というのは旧約聖書の律法の定めです。今、主イエスの前に一人の女性が引き出されてきました。男はすでに殺され、女だけ、主イエスを罵るにかけられるために生かしておかれたと想像できます。人々はイエスの答えを待っています。女性は、どうせ私は殺されると、イエスがどのようにお答えになっても自分とは関わりがないと、諦めています。

主イエスは一言も答えられません。ただ地面に何かを書きつけておられます。人々が責め寄ります。ついに「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まずこの女に石を投げなさい」(7節)と、ある映画では、近くにいた老人に石を拾って「投げろ」と突き付けられます。老人は後ろに下がります。次々と、人々は後ろに下がり、誰もいなくなってしまう。「婦人よ、だれもあなたを罪に定めなかったのか」(10節)。「主よ、だれも」(11節)と女が答えると、「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」(11節)と、主イエスは言われます。この瞬間、女性と主イエスとの深い関わりが生まれました。

その後、彼女は主イエスに従い、ほどなく主イエスの十字架の下に立ちつくし「父よ、彼らをお赦し下さい。何をしているかわからないのです」(ルカによる福音書23章34節)という祈りを聞き、主イエスの復活の出来事にも出会って、喜びの人生を送ったはずで

姦淫の罪を犯した女が「もう罪を犯さないように」と言われて、堅く自分でそう決意しても罪を犯さないものになれるわけではありません。まして、罪を赦す者になれるはずがありません。決定的なのは、主イエスとの出会いであり、「わたしもあなたを罪に定めない。…もう罪を犯してはならない」という言葉です。

キリストを見上げる時、私たちは真実に出会います。私たちには「赦せない」という現実で終わらないさらに奥にある真実、この私たちでも赦す者になれるという真実の道を、主イエス・キリストは切り拓かれました。

「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない、罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」。

(ヘブル人への手紙4章15節)主イエスは、怒りが渦巻いたとしても、その怒りと憎しみを神への祈りに変えられたのです。主イエスがまことの人間であり、またまことの神であられるのは、十字架の上のお姿に現れています。主イエスの処刑を実行し、見届けたローマの百卒長が「本当に、この人は神の子だった」と叫んだ通りです。

一方、私たちには自分の罪を知らないと言いき、自分は人を赦すことなどとてもできませんと言って終わりにしてしまう、危うさというか、傲慢があります。神の御子だから赦せるのだ、ただの人間である私にはできない。しかし、そこで終わってしまっていたら、私たちは再び主イエスを十字架につけることになります。赦せない、そこで終わるのか、「私たちもまた赦す者になりたい、赦す者にしてください」という祈りに繋がるのか、そこが問われます。

キリストが祈りの道を歩まれたからこそ、私たちも赦す者にしてください、と祈れるのです。私たちもあのように祈りたい、私も赦せたらどんなに良いだろう、という素朴な憧れ、それが信仰の第一歩です。この祈りは主イエスに従う者の祈りのモデルとなりました。使徒行伝7章のステパノの祈りです。

詩編51編の中心は、ダビデの、神に対して罪を犯したという告白と、もう一度、私を創造してください、という願望です。神への罪が根本にあり、私たちお互いの関係の中に形をとって現われます。ですから神に赦しを乞わない限り、誰かに謝ることもありません。「神よ、わたしの内に清い心を創造して新しく確かな霊を授けてください。」(12節)ダビデの叫びです。できることなら、この人生をやり直したい、そしてやり直せるのです。

「主の祈り」の「我らがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」という祈りは、“私には難しい”とってすますような信仰で、皆さんには立ち止まっていて欲しくありません。キリストの指し示す深みへ、高みへ、広がりへと進んで行って欲しいのです。また、そうなるという約束です。この約束を信じて私たちは歩みましょう。

(記 朴 憲郁)